



発行

財団法人 東京都生涯学習文化財団

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033

多摩市落合1-14-2

☎ 042-373-5296

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 54

平成14年 3月12日

<http://www.tef.or.jp/maibun/>



▲「外神田四丁目遺跡」の現地説明会風景

新たな調査体制への取り組み

所長 尾崎 眞 幸

平成十三年度の当センターの埋蔵文化財発掘調査は、当初計画では13箇所4万190㎡であったものが、実績では16箇所5万515㎡となり、整理調査だけの事業数を含めると25事業になります。最近の傾向としては、調査面積の規模が小さなものが多くなり、調査現場が増えてきています。現場が増えるとしても、センターとの迅速な連携がとりにくくなってきます。

そこで、昨年10月に各調査現場にある分室の「とりまとめ役」としての分室責任者を配置し、調査現場とセンターとの連携強化を図りました。今後、全都的な調査事業を取り組む中で、さらに拠点方式の検討も必要かと思われれます。

また、今年度新たに、民間企業の開発に伴う調査事業を受託することに伴い、その調査体制もこれまでとは異なったものにする予定です。埋文センターは、調査の内容や工程管理などの調査管理業務を行い、発掘業務作業等の調査支援業務は施行者が直接作業会社と契約し、作業にあたっては、調査研究員を補助する考古学を専門とする者を配置することにしましたことです。

このことにより、大規模な調査面積をこれまでより短期間で調査を行うことが出来るとともに、センターとしても直接作業に関わる業務を省くことができます。

このように、厳しい経営環境が続く中では、効率的な事業執行を行っていくために、様々な工夫をし、弾力的な調査体制をつくっていくことがさらに求められています。

遺跡だより ⑥2



奈良時代の土器出土状態

船田遺跡は八王子市長房町に所在しており、盆地に突き出た船田丘陵南縁部の舟田川と南浅川に挟まれた段丘面上に立地しています。標高150〜160m付近にあるこの遺跡は、全国でも屈指の集落遺跡として知られています。

昭和四〇年代に実施された約十萬㎡にも及ぶ二度にわたる調査では、おもに弥生時代〜平安時代にかけての竪穴住居跡300軒以上、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代後期の石室墳などが発見されています。とくに、六・七世紀の住居跡が200軒ちかくも検出され、濃密な分布状態を示していたことから、東国における古墳時代集落の代表的な例として、強い関心が寄せられてきました。

また、隣接する中郷遺跡では、弥

生時代後期の住居跡から小銅鐸が検出されており、本遺跡を含む周辺地域は、考古学的にきわめて重要な地域といえるでしょう。

今回の発掘調査は都営長房団地の建て替えに伴い実施したもので、第一次調査範囲の西側に広がる約二万八千㎡が対象となっています。調査は昨年の9月から開始し、現在は北側の調査区（西からA・B・C地区）を中心に作業を進めています。調査の進捗は未だ20%にも満たない段階ですが、これまでの主な成果についての概要を紹介します。

A地区では、平安時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟の他、古代〜近世の土坑やピット群が検出さ



平安時代の住居跡と掘立柱建物跡（A地区）

れています。住居跡からは土師器、須恵器をはじめ、灰釉陶器、鉄器等が出土しています。この中で、2号住居跡は一辺5mの規模を有し、床面に小鍛冶作業用と推定される炉が確認され、壁溝には多量の炭化材が廃棄されていました。工房的性格を有する住居として注目されます。

B地区は造成等により約半分ほどが壊されましたが、南側で奈良・平安時代の住居跡が6軒検出されました。そのうち4軒が奈良時代の住居跡で、いずれもカマドの袖に砂岩の切石が使用されていました。船田遺跡ではこれまであまり確認できなかった、当該期の居住域が明らかにありつつあります。この他、中・近世の土坑等も多く検出されています。

C地区でも古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されています。本格的な調査はこれからですが、この地区では、八王子市御殿山窯跡群で焼かれた須恵器甕や壺の破片が大量に検出されています。これらの遺物が遺構に伴うものかどうかはまだわかりませんが、村落祭祀等により廃棄もしくは供献された可能性もあります。調査が進めば、その性格が明らかになるものと期待されます。

古墳時代後期の大集落跡として注目されてきた船田遺跡ですが、今回

の調査によって、奈良時代以降も継続して集落が営まれていたことが再確認されました。第一次調査以来、四半世紀以上の時を経て、本遺跡は拠点的な「古代村落」としての新たな様相を見せはじめています。



B地区における遺構の分布

律令体制下において、古代多磨郡内に所在した船田集落の経営基盤や性格、人々の暮らしがいかなるものであったのか、今後の発掘調査を通じて解明していかなければならぬ課題が数多く残されています。

（松崎元樹主任調査研究員）

外神田四丁目遺跡(その1)

平成十三年六月から丁R秋葉原駅北西側にある外神田四丁目遺跡の発掘調査を進めています。遺跡の時期は江戸時代が中心で、江戸時代の前半は大名・旗本の屋敷地、後半は武家地と町人地の町割になっていました。

文化財講座 <44>
大江戸掘りもの帖 ~二十一~

江戸初期の当地付近は上野の不忍池から流れ出した谷田川が南へ向かい、江戸湾に注いでいました。遺跡内には黒いヘドロ状の粘質土や砂の層が広がっていることから、当時の外神田は湿地や沼地であったことがわかります。

備に伴い、神田川を掘り割り、湿地であったこの地を埋め立てて江戸の下町を広げていきました。埋め立て工事に使用した土留めの杭や「しがらみ」が下層から見つかります。



土留めの杭と「しがらみ」



埋め土の断面観察

埋め立て用の土は、湿地を掘りあげた土ばかりでなく、台地上の赤土(関東ローム層)もあることから、神田の山を切り崩して埋め立てたようです。当地を江戸時代の絵図や明治の地図をたよりに調べていくと、江戸時代の前期の武家地には、正木、堀、川口、遠藤、小笠原、加藤、神谷といった大名・旗本の名前が認められます。江戸の後半には調査区西側は町人地となり、明治には山本町として地図に残っています。

*次回は検出された屋敷境、石垣、池跡の遺構や、貝層から出土した陶磁器等の江戸時代の遺物について述べたいと思います。

(及川良彦主任調査研究員)

保存科学室(ぼれ話)(十八)

彩色土器に見られる赤と黒(1)

多摩ニュータウンのNo.243遺跡から赤と黒に着色された縄文中期の土器片が出土しました(図1)。彩色面を拡大すると、赤色面は薄膜状のやや光沢をもつ物質で平滑に覆われ、その下から小粒子が不規則に浮き出したように見られ(図2)、黒色部は「うろこ雲」状の比較的均一な凹凸面(図3)が観察されました。それぞれの表面物質をフーリエ変換

赤外分光光度計で測定した結果、赤色部では図4に、黒色部は図5に示した波形が得られました。古代の遺物から赤色彩色にはベンガラや朱と漆(図6-ベンガラ漆)が、また黒色彩色には漆(図7)やアスファルト

が使われていたことは解っています。ベンガラ漆の基準波形と比較すると、いくつかの波長が異なり、赤色および黒色の顔料固着剤にはいわゆる漆以外の物質が使われていたのではないかと考えられる結果が得られました。その物質について、現在研究中です。(門倉武夫)



図1 彩色土器

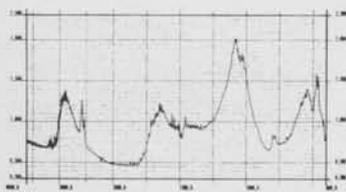


図4 赤色部のFTIR波形

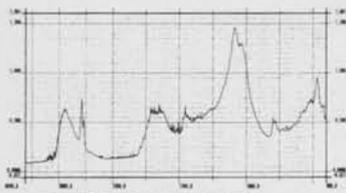


図5 黒色部のFTIR波形



図2 赤色部拡大写真

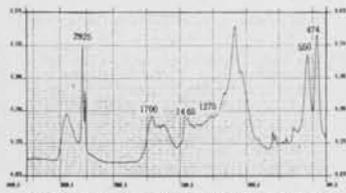


図6 ベンガラ漆のFTIR基準波形

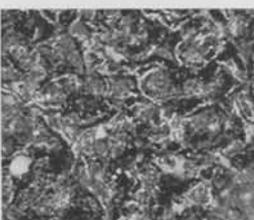


図3 黒色部拡大写真

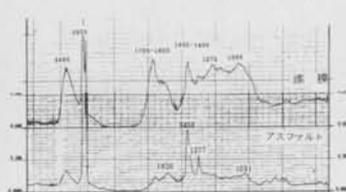


図7 漆膜およびアスファルトのFTIR基準波形

文化財講演会

第四回は、平成13年11月10日(土)江戸東京博物館小林克氏による「あかりの今昔―道具と使い方―」の講演と、「浮世絵にみる町人のくらし」の映画を上映しました。参加者は、76名でした。

第五回は、平成14年1月16日(水)、当センター保存科学室の門倉武夫氏による「文化財科学のあゆみ」の講演と、「東京の近代洋風建築―その歴史と保存―」を上映しました。参加者は、124名でした。

第六回は、2月6日(水)当センター主任調査研究員丹野雅人氏による「縄文のむら―No.72遺跡からみる―」の講演と、「一万年前の2DK」を上映しました。参加者は、187名でした。

No.520遺跡現地説明会

若葉台小学校

12月初旬に、稲城市立若葉台小学校の授業の一環として遺跡の現地説明会を行いました。一年生から六年生までの全校生徒が学校から見える遺跡を熱心に見学しました。

初めてふれる考古学の世界に輝く目で見入る様子が印象的でした。特に調査中の住居跡から遺物が出てくる状態や、掘り上がった住居跡

の柱穴の深さに驚く気配が伝わってきました。「家の跡はどこやあって見つけたの」「お風呂はどこにあったの」など、数多くの質問も飛び出し、生徒たちの関心の高さが感じられ、充実した見学会となりました。



遺跡から小学校を望むと…

外神田四丁目遺跡現地説明会

12月15日(土)12時から15時まで行いました。師走で賑わう秋葉原電気街の入り口での現地説明会には、1232名という大勢の方の参加がありました。

今回は、発掘作業風景も含めてご覧いただきました。(巻頭写真参照)

東京都遺跡調査研究発表会

2月3日(日)に港区立赤坂区民

センターにて開催されました。

当センターからは、川島雅人主任調査研究員が府中市武蔵国分寺関連遺跡を、飯塚武司副主任調査研究員が新宿区市谷本村町遺跡の調査結果を発表しました。

平成十三年度の 広報普及事業をかえりみて

当センターの様々な広報普及事業についての成果の一端を紹介いたします。展示ホールでの企画展は、「縄文のむら―土器とくらし―」をテーマに多摩ニュータウン区域の発掘調査の成果のうち、縄文時代中期の集落を選び八王子市堀之内No.72遺跡で総数274軒の住居跡や、稲城・多摩・町田市で調査された約50軒前後の住居跡をもつ遺跡を展示しました。

文化財講演会は、年六回水曜日と土曜日に行い、参加者は、都内全域はもとより、近県の神奈川・埼玉・千葉県からもありました。

行事関係では、「土器の野焼き」や「映画鑑賞会」、「とうきょう親子ふれあいキャンペーン」は、土器作りを加え年三回、また「縄文土器作り教室」を3日間で行い親子で土器作りの体験に挑戦しました。

「現地説明会」は、秋葉原にある「外神田四丁目遺跡」で江戸の町並み調査を公開し、多摩ニュータウン

では縄文時代中期のNo.520遺跡で稲城市若葉台小学校全校生徒の見学がありました。

このように、当センターでは都内全域での発掘調査を行いながら、都民の方々に調査内容の公開や、縄文土器作りの体験などを行い、文化財の普及事業に取り組んでいます。

平成14年度の広報普及事業について

1月に行われた広報委員会
で14年度の計画が決まりました。
文化財講演会は、年六回で
第一回は7月13日(土)です。
映画鑑賞会は、年二回で、
午前は小学生、午後は一般の方を対象に行います。第一回は6月20日(土)です。
とうきょう親子ふれあいキャンペーンは、土器作り教室を加えて年三回行います。
春の土器の野焼きは、5月11日(土)、縄文土器作り教室は、8月に行います。
詳細は次号に掲載します。

分室の開設

2月以降、新規の分室です。
お茶の水分室 千葉基次係長、
竹尾 進



古紙100%配合の再生紙
を使用しています。